



巻 頭 言

「2000 年から 2001 年に想うこと」

財団法人 日本植物調節剤研究協会理事 高成 俊行
三共株式会社 アグロ事業部長

近代農業の発展は今世紀の半ばの、1947 年の農薬検査所開設、1948 年の農薬取締法公布（農薬登録制度開始）、1950 年の植物防疫法公布、農林省植物防疫課設置から始まり 50 余年たった。また、日本植物防疫協会、農林水産航空協会、日本植物調節剤研究協会が次々と設立され、農薬の研究、普及に大きく貢献し、1967 年には米作有史以来の大豊作（1,445 万トン）になるまでに至った。しかし、その後、減反政策に発展し、2001 年には 101 万 ha の減反になることも決定され、益々 21 世紀の農業情勢は厳しくなっていくことが予想される。

さて、除草剤（特に水稻）の変遷を見ると 1950 年に 2,4-D が登録され、1957 年に PCP、1965 年に MO 粒剤が登録され、1969 年のサターン S 粒剤の登録によって、MO + サターン S の体系処理が定着し、一時期には 130 万 ha もの水田で防除された。やがて、多年生雑草が問題となり、1975 年にマメット SM 粒剤が登録されたが、この頃から農業情勢も一変し、農家の高齢化、担い手不足等から省力的な一発処理除草剤が要望され、1982 年にクサカリン粒剤、さらに多年生雑草に強力な効果を持つ SU 系配合除草剤が 1987 年に登録された。1900 年代には処理方法が簡単なフロアブル剤、ジャンボ剤、少量拡散粒剤などの製剤検討が盛んになってきた。

21 世紀にはさらに環境を配慮した製剤、施用法の検討普及が本流になると考えられる。

2000 年から 2001 年を想う時、私は「二人のヒラリー」のことを頭に浮かんだ。21 世紀の話題では、アメリカ次期上院議員ヒラリー夫人で、女性初の米国大統領とも噂される。しかし、私は少年時代に感動した登山家のエドモンド・ヒラリー卿を思い浮かべる。卿は 1919 年にニュー

ジーランドの養蜂家の息子として生まれ、11 才で中学に飛級、15 才でオークランド大学に合格したが体力がなく、運動は音痴で常に劣等感を持っており、途中で挫折中退し、父親の養蜂の手伝いをしていた。これによって体力にも自信ができ、手伝いの合間にサザンアルプスと呼ばれる山々を登頂して、1951 年にはヒマヤラ登山ニュージーランド隊に選ばれた。一方、エベレスト挑戦は、まずイギリス隊が 1951 年 9 月に挑んだが失敗、翌年スイス隊も失敗した。1953 年にイギリス隊からの要請によりニュージーランドから卿が選抜された。5 月 26 日に英人 2 名が登頂アタックしたが失敗。この時、卿は悲しいと感じたという。山をよく知っている現地のシェルパをなぜ起用しなかったのかと思った。当時の卿はネパールの人、テンジン・ノルゲイとペアを組んでいたが、応援補助であった。28 日にこのペアに再アタックの命が下り、2 人は前線キャンプを出発した。夜になると酸素が少なく不安に陥り、夜明けが長く感じた。卿は振り返り語っている。翌朝 29 日は -27℃、快晴で順調に 8800m 付近まで来たが垂直の壁に遮られ、断念かと思った時、右に割れ目があり、その先に這っていけるルートを発見し、左足で蹴って飛び移った。午前 11:30、遂に 8848m の頂上に立ち、シェルパのテンジンにインド旗、ネパール旗、英国旗、国連旗をかざさせた。このように苦労するものへの暖かい思い遣りに感銘した。

卿は現在もニュージーランドで 81 歳で元気に生活され、国の英雄として崇められている。

勝手な思いを述べたが 21 世紀の農業を考える時、現地、現場での意見、経験を大事にすることがより良き発展に繋がって行くだらう。